
雨に関わるある光景

ムネクニ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨に関わるある光景

【Nコード】

N30900

【作者名】

ムネクニ

【あらすじ】

雨上がりの通学路を、列を成して歩く子供達。彼らは潰れたカタツムリと、その隣に落ちている小人を見つけて足を止めた。

雨上がりの通学路を歩く子供達がいる。

先ほどもで子供らしい陽気さではしゃいでいた彼らは、今一様に足を止めていた。

複数の視線の先には、潰れたカタツムリの残骸がある。しかしそれだけならばよくあること。「気持悪い」の一言で素っ気無く通り過ぎたはずだった。

いつもと違うのは、どろどろしたやわらかいものと粉々になった殻の隣に、小さな人間が倒れていたことである。

彼らの小さな親指くらいの大きさのその人物は、倒れたまま一向に目を開ける気配はない。

「ねえ、これって人間」

普段自分から話し出すことの滅多にない依子が口を開けば、眼鏡を押し上げながら一斗が答える。

「いや、こんなサイズの人間がいるわけないよ。そんなこと、この本にも書いてなかったし、大人だって言ってなかったもの」
「いや、でもこれ動いてるぜ」

すぐに筆記用具を壊し乱暴者と呼ばれる一方で大の虫嫌いの佑太は、目線にカタツムリを入れないように必死になって言った。

確かによく見れば、その人間の胸は定期的に上下しているようだった。仰向けになっているため、その動きは小さくとも非常にわかりやすいものだ。

「依子、あんた触ってみなさいよ」

それまで黙って様子を観察していた君江は偉そうに言う。三人はこの君江という女子には逆らえない。幼馴染という互いに知り抜いた間柄にとって、力関係は絶対のものであった。嫌がる

そぶりを見せる依子に気付きながらも、一斗と佑太は助け舟を出すことが出来ず、ただ見守るばかりである。嫌だよう、あんた言うこと聞けないの、だって。

しぶつては見せても結局最後は君江の言う通りになってしまう。その事実をわかっていながら尚も拒否を続けるのは、依子の心のうちに、やりとりの間に対象が消えてしまえばいいという

目論見があつたからだ。しかし、そんな願いも空しく、小さな人は呼吸活動を除いて、全く動く気配をみせなかった。

「この前お母さんの化粧品勝手にとってきたこと、言いつけちゃうから」

「だってあれは君江ちゃんが」

「はあ。そんなこと言っているの」

あくまで君江は強硬な姿勢を崩さない。一斗と佑太はなんともいえない気まずさを感じていたが、やはり君江には逆らえなかった。

「……わかった」

「ふうん」

依子が二つの長いお下げを揺らして頷くと、君江は満足そうな顔で一步後ずさった。

「ちょっと君江ちゃん、今なんで後ろに下がったんだい」

「やっぱ怖くなったのかよ。じゃあ、やめようぜこんなの」

「馬鹿ね。怖くなんかないわよ。でも被害が及んだら嫌じゃない。

相手が人間だったら言葉も喋るし頭脳もあるのよ。見た目どおり大人なんだったら私達より頭いいかもしれないし、用心に越したことはないじゃない」

「そんな」

君江の言葉により一層恐怖心を掻き立てられた依子は、いよいよ泣きそうになっていた。助けを求めて一斗と佑太を見れば、二人はそれぞれ明後日の方向を見て視線を反らした。

なんなの、君江ちゃんて。

その瞬間、依子は今まで感じたことのないドロドロしたものが自分の中で生まれるのを感じた。

すうつと胸が冷たくなる。この目に映る世界の温度が若干下がったように感じた。

一斗君も佑太君も、助けてくれるって前言ってたのに。

「ちょっと、何固まってるのよ。早くしなさいよ」

多少の距離を持った声がかかる。いつの間にか依子だけでなく一斗と佑太も、遠巻きに彼女を見つめていた。

その事実気付いた途端、なんだか目の前の死骸も小さな人間もどうでもよくなってきた。

気持ち悪かった。怖かった。不気味だった。

でもそんなの、あの人達よりましだわ。

軽くなったような重くなったような妙な気持ちで手を伸ばした。その瞬間、

「あつ

」

人が、目を開けた。

彼は気がつくあたりをきよろきよろ見回した。そして、すぐ隣の

カタツムリの残骸に気付いたようだった。

立ち上がり、パンパンとズボンの尻をはいたその人間は、依子を気にする様子もなく、残骸へと近づいていった。

何をするのかと見守る彼らの前で、その人間は悠々と殻を再構築していった。

軟体部が潰れてできた粘性の高い液体を使って、殻の破片を迅速に繋ぎ合わせていく。あつという間にそこには見慣れた「カタツムリの殻」が登場した。ただし、中身は勿論ない。

そこで人はいったん考えたようだった。何故そう思ったのかといえ
ば、彼は腕を組んで下を向いたのである。

当然のことながら、距離をとっている君江たちにはそれが見えなかったらしく、当たり前のように依子への命令が飛んできた。

「なんか止まったけど、そいつ、どうなったのよ」

教えなさいよ、と続けたかったのだろうと思う。しかし、依子がその不快な言葉を聞くことはなかった。

それまで周囲など気にも止めていない様子だった小人は、声がするなりその方向へと顔を向けた。その顔は、獲物を見つけた狩人のように薄暗い笑みをたたえていた。

小人が腕を解き、君江に右手の人指し指を向けると、彼女はぐわつと歪み、小さく小さくなっていった。

皮膚はぐにゅぐにゅに弛み、途中で目の玉が転がり落ちた。体の内側から絞りとられた水分が外側へと露出し、その有り様はまるでナメクジの如くとなつた。

ひいひいひいひいひいひいひいひいひいひい

その姿を見て佑太は絶叫した。

はつと気付いたように小人の視線が佑太へと向けられる。先ほどとは違って面倒そうな顔をした小人は、今度はだるそうに指を向けた。しゅるしゅるしゅると、人の体が縮んでいく。依子の視線の先、一斗の右隣には、今や二体のナメクジが出現していた。

小人は修復した殻を腋に抱え、地面を這いずる二体の生物へと近づいて行った。

殻を地面に置き、空いた両手でひょいと二体を抱える。そのまま殻の入り口へと無理矢理押し込むと、そこには双頭のカツムリが誕生していた。

小人が殻を横から蹴ると、それは酷く不器用に這いだした。体がもつれるのか止まっては蹴られ、蹴られては動きを繰り返し、それらは依子の前から姿を消した。

ふと気がついて一斗を見れば、彼は立ったまま気絶していた。色の濃くなっているズボンの股座と地面を湿らすものを見て、依子にはこりと笑った。

「麻美。駄目よ、ほら」

公園で遊ぶ親子、という時に微笑ましい光景がそこにある。しかし翳った空と湿った空気は、雨の訪れを予感していた。

「はい」

元氣よく返事をして、子供は木の枝を手放した。先ほどまでコンクリートに貼りつくカタツムリを突いていたものだ。

「依子は優しいな」

「またからかって」

「虫に対してだけな」

「他に優しくないみたいじゃない」

俺には優しくないぞ、そういつて夫は悪戯っぽく笑う。

「もう。だって、潰しでもしたら大変なもの」

いじめるのは別にいいんだけど。

「ん。何か言ったか」

「何でもないわよ」

依子は一こりと笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3090o/>

雨に関わるある光景

2010年10月15日23時19分発行